言靈妙用論　下卷

堀秀成著

ホ 2
4297
2 土

堀秀成先生著

言靈妙用論 二冊

南浦堂藏版

說文ニ單出ヲ為
雜成文為音音、
具タル為韻、

言靈妙用論下卷

○聲音の出る本源の事

五十音の大意を心得るには、まづ聲音の出る本源
よりも辨ふべし、さてその聲音の出る本源を知ら
むには、嬰兒の初聲を揚る形狀よりして辨ふべ
し、されハまづ母の胎内にて形を結べるとき、産靈
神より聲音の種を給りて持てるものなるが是我
元氣といふ、

元氣とは人体をなせる元よりもてる氣なれ

門 ホ 2
號 4297
巻 2

ばいふなり、
如此（カク）聲音の種ハ其ノ初メより持てるものゆゑ、胎内
に在る間（ホド）ハ口より大氣を（大氣ハ空氣とも云）呼吸を爲こと
なければ、聲音の發ることはならざるなり、
聲音ハ体内の氣と天地間の大氣と和合し
て發るものなればなり、
斯て口より大氣を呼吸することなくて、母の血氣
臍帶（ホゾノヲ）より送りて其子の体に及ぶものなるが、血
ハ大氣を吸ふまゝに活動をなすものなれば、即（スナハ）チ
母の吸へる大氣を其子に及ぶといふも理（コトハリ）な

らずとはいふべからず、さてうく母の氣血を受
るまゝに其資補（タスケ）をえて元氣盛になり、その元氣
の盛なるに随ひて、其ノ形も成大（テビ）ゆくこと譬へば
蔓（ツル）になれる瓜などのその蔓より地氣を送（オク）りて、
其の實に及して内より外に張るまゝに終にその實の成熟（ナリトヽノ）ふに
専ラ同じことなり、斯て元氣弥盛になりて生出むとする間（ホド）に至り
ては其ノ氣喉口の間に滿ちて溢れいでむとする勢となる、
此レ天地初發ノ時、大虚中に一ノ物成りて其内に
牙（カビ）を含メるに、其牙活發して萌騰らむとするに、是
大氣の活動をなし初メなるに、形状自然よし

相合ひたるを思ふべし、猶此らの事ハ音義
本末考に云へるを見て知るべし、
さるに月満て母の胎を離れて産出るとき、大氣
鼻より押入るに喉口の間に満々たる元氣ハ、そ
の大氣に誘れ、同氣相感し活発して口よりウア、
と初聲を揚る、此人一生の間言語となる音聲の初
なり、
喉より溢れ出る聲ハウ、にて其聲、口の内
に出て口を開くまゝにア、と成りて、ウア
アと云なり、さるを世に初聲をオギヤアと

譯すハ拗音にて譯しうたのわろきなり、紫
式部日記に稚子の啼聲をアいといふと見
えたるハ、オギヤアと譯すに校べてハよろ
しき方なれど、猶ア聲の頭にウ聲を帯びた
るを聞遺したるもの也、都べて物の聲ハ聞
取に從ひて何にも聞取らるゝものにて、鳥
の音なども譯すに種々にうつしきけバ何
れにもきこゆるが如し、鶯なども上古にを
ホヽ、ホキとやうに聞しものとおぼえて出
雲風土記にハ法吉鳥と見えたるを、古今集

の項ハウヽウグとヽ聞けむ、同集の歌にう
ぐひすとのこ鳥のなくらせとよめり、
滿々たる元氣大氣と和合して音聲をなして、喉
より溢れ出るハ必ウアヽと云聲ならずして他
に聲ハならぬ理なるを、そハ試に口并掌もて覆
ひ息の喉内に止れるを堪へがたきまでありて、
急に掌をとれバウアと云聲ならでいづる事な
きをもて知るべし、此胎内に在る間(ホド)滿止れる元
氣の產出て急に聲をなして、喉より溢れいづる
に專ら同じけれバ也、

うま

遠方にて角力など乃場、其外數多の人の聲
を揚るハウアヽと聞ゆるものなるが、なか
これも同じことなるを、
有ノ音ハ諸音の初メなること、此ノ一ツにても明なり、此
てまた初聲に有音を揚るのミにもあれバ、小兒
初メてものいふに必ズ有(ウ)麻(マ)といふ、
數年おかくの人にも示し、自ラも數多の小兒
を試るに、他の言を発(オコ)さバなく、必ラず初言に
有(ウ)麻(マ)といふハ奇しきことなるを、
有麻ハ美(ウマ)にて物を美(ホ)稱(メ)ていふ言にて、貴(ウマ)人(ヒト)、美(ウマ)酒(ザケ)、

美織美少女美小濱など例多かる言也、
物の味をウマと云も其味を稱美ていふ言にて、此言の本ハひらば、唯稱美いふ言の中の一ツなるのミ、
人の身我養ひ命を保なる食物を美稱て、有麻と云ふがまづ詞の初メとハなるものなりけり、建珠録に（吉益が醫書也）淀の家人山下某が男子の病の為に十三四にいたるまでものいはざりしが、やゝ其病の治りたるに及びて、初メて有麻といふ言を発したる由見えたるが、此ハ病によりてきふことゝなれるもら、初メて言を発せしに有麻といひしを思へば、寔に人たるものゝ言語の初ハ有麻といふべき自然の理定れるものとおぼえたり、

○物に觸れて動く心有聲の中に含ミ舌に觸れて諸音をなす事

見るもの聞くものゝ又物の身に觸るにつけて心ハ感くものにて、譬へば花を見ていと美しと思ひ、幼き子を見て愛しと思ひ、あるハ面白き物に音を聞て楽しと思ひ、或ハ悲しき聲を聞て哀と思ひ、また針の身に觸れて痛しと思ひ寒風の

身に觸れて寒しと思ふなど、をぞて嬉し悲し樂
し苦し戀し恨しなど思ふハ、見ること聞くこと
なるによりて心夫に感きて然思ふことなるに、
如此心の感く時ハ元氣もまた從ひて動きて元
氣中に其思ふことを含みて発りいづるに、呼吸
なる大氣と和合して忽音聲を生じ、此時その云
むと思ふ意はいづれにもあれ、喉より発る音聲
ハ唯有一音に混沌て、口内に送りいで舌の活戈
なきまゝに、有聲ハその云むと思ふ意の音に変
りて、何れの言をもなじもの也、然れバ千言萬語

とも喉に発るときハ皆有一音にてあるを、舌の
活にて何れの音にも変りゆくもの也、此をもて
諸聲の本ハ有音にて有音即五十音の基なる戈
知るべし、譬へバ笛を吹くに管中に吹入る息
ハ唯一聲なれども、指の開閉に從ひて種々に音
変るが如し、

管中に吹入る一聲ハ有音の如く、指の開閉
に從ひて音変るは、舌の活によりて有聲然
諸音に変るがごとし、

またハ風の物に觸れて種々の音に変るがごと

し、
人に依りて八音聲となり、天地に依りては
風となる、共に大氣の活動なれバなり、さて
風の音の唯一ツなるハ有聲の如く、物に觸れ
て変るハ有聲の舌に觸れて音変るなどと
し、
斯て風の松の葉などに觸るゝときはサーとなり、
佐ノ音細なる象によりて自然細なる物を佐ノ音
にうつしなどして云、そハ細笹小浪小栗、
佐々良小川小言小形錦篩佐々良荻聊など

限りなく多かり猶別に云べし、
幕などに觸るゝときはバラ〳〵となる、
物の披りたる象を波ノ音にうつしのたぐひ
て云ッ、波ノ音はその象なれバなり、そハ幅張披
拂散掃花春など限りなく多かることとなり、
皆その觸る物に從ひて風の音変ることゝ、譬へば
喉には有ル一聲に發りてその聲引縮メて短くせバ
舌に觸るゝときハ短き貌の聲を生し、衝出シて長
くせる舌に觸るときは長き貌の聲を生には専ラ
同じことゝ也、

短き貌の聲ハ久、音となり、長き貌の聲ハ須、
音となる、よく呼び試えて知るべし、
斯てまた音聲ハ心の種となりて発り出るもお
ふれバ、此方の心の随に彼方の心をも動し変ら
八るもの也、譬へば春の氣に感く心を種として
聲を発せ鴬の音を聞くときは、即聞く人の心も
春の氣にうつりて秋の氣に感く心を種として聲
を発八虫の音を聞くときは、即聞く人の心も秋
の氣にうつりゆくが如し、されバ悲しき心の種
となりていづる音をきけバ自然悲しく、あるひ嬉

あとと

しき心の種となりていづる音をきけバ自然ウ
れしきこゝちせるも皆同じこと也内侍所御神
樂次第に本方拍子取利出音阿知米於々於々と
唱るを衣笠内大臣家良公深秘抄に注して称唯
時ハ塞口、警蹕ノ時ハ開口也とあり、此称唯とは應對の
音にて塞口ヲとなれバ和行の遠にてヲヽと云ヒ警
蹕ハ物の浮立騒しきを謐めて敬ひ畏まれる音に
て、開口とあれバ阿行の於にてオヽと云フ也、さる
は内侍所の御神樂初らせとれるとき、先ツ数多の
人々の浮立たるを謐むために警蹕してオヘオ、

と云也、さるハ其物騒しきを押へ謐めむと思ふ心
を種としてオヽ、と唱ふるときは、於聲の重く沈
ミ下る象の音耳に入り心に徹りて此を聞く人
自然静りて落着く心になるものなり、
於ノ音重く沈ミ下る象あることハ、已が著し
たる音義本末考に委くいへり、
此ハ人のことにかゝれど、譬へば馬を進めむと思ふ心
を種としてシイといふ聲、馬の耳に入れバ進ミ止メ
むと思ふ心を種としてドウといふ聲耳に入れ
バ止れ、

シイハ尖く進む音、ドウハ鈍く止る音なれバ
こと此も音義本末考に據りて知るべし、
如此言語の通ぜざるものすら、心を種として発
る音聲を聞けバきくものゝ心も、其音聲の内に
寓りたる心の俤は変りゆくものなるをよく思
ふべし、これらのことハ常に馴れて誰しも奇しと
もおもはで過ることながら、よく思へばいとも
奇しきものなり、すべて家に飼ふ犬猫の類まで
もその主人の怒る聲、愛る聲を自然よく聞分る
ものなるも猶これに同じこと也、

○聲音に象と意とありて萬物萬事をうつして

言語となる事

物あれバ名あり、名あれバ必其原(モト)あり、其原ハ則その名を呼ふ聲音の義によれるものなるを、聲音の義ハその音の象(カタチ)より生(ナ)るもの也、斯て音の象とは譬へば阿ノ音は口を開きて呼ぶ音なれバ、夫(ソレ)即(ヤガテ)音の象となりて開けたる義を生(ナ)し、於ノ音は口を窄(スボ)めて呼ぶ音なれバ窄りたる義をなれが如し、斯て物に形あり事に状あれバ、その形とその状を音の象と義とにうつして、その言とはなるなり、譬へバ丸きものは都の音の丸き象なる音にうつして、露(ツユ)莟(ツボミ)壷(ツボ)粒(ツブ)圓(ツブラ)頭(ツブリ)培(ツブレ)礫(ツブテ)筒(ツヽ)塚(ツカ)堆(ツカサ)なと限りなく多かり、

都ノ音に五義なれバ、此ノ丸き象ならで他の義にて名づきたる言も多し、

又細長きものハ須ノ音の細長き象なる音にうつして洲(ス)簾(ス)篶(スヾ)薄(スヽキ)杉(スギ)菅(スゲ)末(スヱ)蘖(スバヘ)筋(スヂ)姿(スガタ)蜾螺(スガル)など限りなく多かり、

須ノ音五義なれバ、此細長き象ならで他の義にて名づきたる言も多し、

何れも此に准へて辨ふべし、されバ言の本を釋むにハ必ズ其ノ音の義を見むべきことゝ也、然るを先哲も一音に義を具へたることの発明なかりしかバ、何れの言をも通、略、延、約の四の外に釋くべき便なく、此を放れて解れたることなければ、言の本を解れたるに先哲の説ハ大方強ひごとなるごりおほかるぞかし、

記傳に天(アメ)ハ青見(アヲミエ)、地ハ續埿(ツキヒチ)などいはれたる類ハいづれも言の本義とはいひがたし、天ハ阿米、地ハ都知のまゝにて其ノ義を具へたるものをや、

されど稀には通、略、延、約の言もなかるべきは勿論なれども、そハ百言の中二三言なるを、すべて此ノ四をもて解むとする為るハいみじき僻(ヒ)が言也、

近き頃言の本を釋くに、此ノ四にのみ泥みて釋くことの謬なることを悟りたるハ恐らく大國隆正一人のみならむ、其の他此ノ四を放れて釋くことを辨へたるハをさ〳〵びゐることを聞ざれば、隆正一人のみならむといふハ同じ人の著したる通略延約辨いと

もいひえたる説あるによりて然云也、

斯て此ノ通言、略言、延言、約言の四種の外に、假言、合言の二種ありて、合せて六種あり、此ノ六種ら言の末義にて、本義ハ必ラぞ往々いへるごとくその音の象よりて義をなせるもの也、猶古言類韻一之巻言に本末なる論と、名義本末八種圖とを合せ見て心得べし、

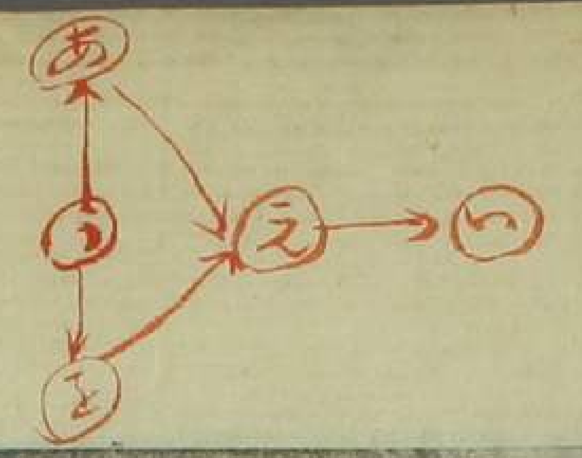
有ノ音ハ諸音の本なる事

古來阿の音をもて五十音本源の音とすれど、然れども動ざれ理ありて有ノ音必ラず本源の音なるを、捲をいさゝかにても発明またる者は、富士谷御杖の北邉随筆の説初めなるべし、次に平田篤胤が古史本辭経、冨樫廣蔭が五十音説、この三人の外ハ今猶阿ノ音を初発の音として足れりとし、さなるを實に五十音有ノ一音より発りていとも奇しく妙なる理を具へたることをば露も知らざるなるゆゑ也、

世に五十音の用といへバ、假字反の沙汰、音の通ひさてハ脣舌牙歯喉のことなどいへるのみにて、此ノ五十音の経緯に限りなき妙用

を具へたるものとハ知らざればなり、富士谷が北邊隨筆平田が古史本辭經共に今ハ世に行るれども、二書とも唯有音初發の音といふ説の草創なるまでのことにて、其理を究めて論を竭にいたらざれば、たまたま彼書どもを見たる輩も古來阿音を初發としたる説の先入を改めて新説に從ふまでにはいたらざることなるを、廣蔭が説ハ彼二書の説に挍べては小サカ詳（クハシ）きかたなれども、此人偏固の學風にて己が説の他に漏るることを厭ひて、弟子の外に傳へざれバ世に知

る人も稀也、斯て有音を呼び試るに其音聲腭（アギト）にも頤（オトガヒ）にも舌にも觸れ障る所なく、遍り曲むこともなく、舌の上を直（タダチ）に出る音也、さるに阿音ハ腭（アギト）に舌遍（カタヨ）り觸れ、於音ハ頤（オトガヒ）に、衣音ハ舌の本に、伊音ハ舌の末に遍り觸るゝ音にて、阿行五音の中有音を除きてその他の四音ハ何れも遍り觸るゝ所なるを、是有音のその觸るゝ所に從ひて阿伊衣於の四音に轉り変るにて、有音ハ本、他の四音ハ末なることをまづ知るべし、斯てまた有音ハ中央に位して、五十音根元の音となることヽ古傳に天地初



発ノ時大虚空中に一ノ物を成せりといへるによく合(カナ)へる音なり、そは此ノ有ノ二言より分れ出て重く頤に降り窄りて於ノ音となり、軽く腭に昇り開けて阿ノ音となる、此ノ彼ノ一ノ物より分れて泉(ヨミ)は下に位し、天(アメ)は上に位したるに合へるを初ノ其ノ於阿の二音哉呼び試るに、於は其息頤の方に重く降りたるを、長く呼ぶまゝに上へ蒸上ぐる象をなし、阿は其息腭の方に軽く昇りたるを、長く呼ぶまゝに下へ蒸下る象をなせり、此ノ地下より常に蒸発せる氣は昇り、天より大氣の降るに合(カナ)ひたればなり、如(カク)此(ノ)

於は蒸昇し、阿は蒸降しつゝ、於阿ノ二音親しく通ひて萬物を生成せるにまたよく合へり、故此ノ於阿ノ二段の音をすべて上下に遠く放りていと近く通ふことも此ノ理によるものなり、さてまた於ノ音内に衣ノ音を含(ヌ)めるを、阿ノ音の上より蒸降れば聲息が誘ひによりて於ノ音の氣益盛に蒸発るに從ひて、内に含みたる衣ノ音の生れいづることと、實に男(メ)女(ヲ)の交(マジ)接(ハリ)によりて子の生るゝに専ラ同じ理なりさて其ノ衣ノ音伸び進みて其末の方伊ノ音となる、此ノは衣ノ音より別に伊ノ音の分れいづるにも

ひらびて、衣音そのまゝ伸び進みて、末の方伊音となり、本の方則衣音となるなり、そは衣ハ舌の本に因りて、伊ハ舌の末に因りて、本末の差ハあれども全く同音なれバ也、此於音ハ内に含める衣音ハ阿音の誘ひ、於音の蒸発るに従ひて生れ出、その本ハ衣音となり、伸び進みたる末ハ伊音となることし、植物の種の地中にあるを天氣の誘ひによりて地氣蒸発するに従ひて、其芽萌えいで天氣の養を受けて長成するに奇しきまで合ひたるをよく思ふべし、さて五十音竪

の位ハ有音ハ中央に止り於音ハ下に、阿音ハ上に位し、衣音ハ於音に属し、伊音ハ進みて阿音に下に列りて、阿音に属く此を上より直讀にするとき阿伊有衣於とあり、今生に従ひて轉讀するときハ有於阿衣伊とある也、猶有音阿音先後に論をはじめ、種々の委しき事共ハ已に著したる音圖大全解にいへれバ、玆にハその百が一ツをいふのみ、

○横韻位置の事

有久須都奴布牟由流宇と横に並ぶを韻といふ、

開音（外）合音（内）

此段を本とじたるは、本源の音なる有、音の横、列なれバなり、

此横韻に開合の分ありて、久須都奴ハ開音、布牟由流ハ合音也、

此レに又開中、開合、合中、開合あることも音圖略説にいへり、

開音を外音といひ、合音を内音ともいふ、ならくて開音は内より始りて外に終り、合音ハ外より始りて内に終る、一回せること輪を画きたるが如キものなり、然るに開音の内より外へ一音毎に進みゆく義なれバ、其初なる久音舌を引縮メて呼ブ音也、そは伸むとじるものハ必ずまづ屈むべき理をまぬかれねバなり、次にその屈ミたるを力として伸るが則須音にて、須音ハ舌を進メて呼ぶ音なり、次に伸進むものハ必強く、強きものハ自然物に衝當る勢あるものにて都の音を呼フに其聲息強く勢ありて舌の断に衝當る音なり、次に勢あるものも物に當るときハ其勢和ぐものにて、奴音ハ聲息の勢和き舌も平ラになる音也、如此次第に進ミゆきて此奴音にて和ぎて開音ハ盡る也、斯て開

音盡きて合音初る、然るに合音ハ漸退き戻る義なれバまづ布ノ音の唇を合せる音初メと成る、譬へば初メの有ノ音は夜の明るがごとく、久須都の音ハ朝日の豊栄登に弥進ミて、奴ノ音に至りて夕ベに及ぶ如く、此ノ布ノ音ハ日の暮初るが如し、次に其ノ唇を合せふことの今一ト際強きが牟ノ音也、次に外より内に及びて舌を内に控へ寄るが由ノ音也、

牟ノ音にて外ノ方唇強く閉合ふまゝに、内の方舌に及びて退く義とある、

次に其ノ舌を強く引寄る音則流ノ音なるに、斯て唇も

閉チ舌も引縮ミて聲息の喉に収るが則宇ノ音なるを、長く呼ぶときハ聲息再ビ発るまでに、初の有ノ音となる、こハ自ラ呼び試るときは誰もよく心得らることも也、

終和行の宇は聲息候に収りて死るが如し、

初阿行の有は聲息初メて喉より発りて生るゝが如し、されバ此ノ有宇の二音に生死の理找具へたるに、今現に闘絶せるもみなは和行の宇聲をなし、蕪生ルものは阿行の有聲をなし、然れバ古言のうへにても此ノ有宇み意

に表裏の義あるを、一併して同音のごとく
假字用格の差別をいはざるは杜撰のこと
なりと委しくは已に著したる假字本義考
にいへり、

○三十六音分生の事

阿伊有衣於の経(タチ)を母音とし、久須都奴布牟由流
宇の緯(ヨコ)を父音として、三十六音は分生ずるなり、
そは久音と於音と急に呼び合するときは自然
古(コ)音生る、其正しき呼法は久音は舌を引付る音、於音

は顋(オトガヒ)を下る音なれば先久音を呼ぶ如く舌を
引付て急に顋を下して、於音を呼ぶ如く
すれば正しく古(コ)音生る、何れも父象を口内
にふくみおきて、母音の象に呼ぶときは何れ
の音も正しく分生ずるなで父母音の象を
音義本末圖に委しく載たるを見てまづ暗
記すべし、

すべて父音と於音を呼び合すれば古曽登乃保
母与呂乎の一段生れ、父音と阿音を呼び合すれば
加佐太那波麻夜良和の一段生れ、父音と衣音を

呼び合せれバ介世弖祢閇米延礼恵の一段生れ、父
音と伊ノ音を呼び合せれバ支志知尓比美以利尋
の一段生れて、父母の音より如此三十六音分生せ
ることなりけてこそ五十音中に伊以尋、有宇衣
延慧、於乎等の一應ハ同音と思ふまでいと近く
通ひたる音の有るべきゆゑをもしらぬも然
れ、世の説の如く阿ノ音を初発として按然一
段の音を父音として、阿伊有衣於の音に呼び合
せるときはいかに呼びても三十六音分生せる
ことなきをもて、阿韻の父音にならざることを

知るべし、斯て父母の音に各第一等より第五等
まで一音五義を具へたれバ、合せて七十義なり、
また末義ありてすべて百三義なり、三十六音の
各父母の音義に據りて子音の義を生せり此を
肖義といふ、百三義なり、父母子音合勢て五十音
二百六義をもて天下の言、悉く其義を盡して遺
ることなきをいとも奇異なることなりけり、ま
ことや五十音の義も天地の理と共に限りなき
ものなれバ、此一巻に盡すべくもならざれ、これ唯
大意を辨じたるのミ、猶委しきことは己が五十

音の著書種々なるを見て心得べし、

此ノ書ハ音圖略説と共に初學の輩に五十音の大意を知らしめむ為に作りたる也、そは此ノ音義の學に四級の教法をたてたり、四級とは略、通、分、括の四なり、略とは先ツ初メに大意の講義を聴くをいふ通とは音義本末圖より至初ノ名義八種圖音圖大全まで通して其講を聴くをいふ分とは右の三圖に載せたるを分ちて大意の復問、音圖名目の講究、各音六種の區別を調音し名義の研究を為すをいふ括とハ右のごとく分ちたるをまた一ツに括りて蘊奥を極め盡すをいふ、如此四級の教法に従ひて階級を乱さず次第を守りて學ひゆくべし、終に奥妙に至りてまことに此五十音ハ天地の真理を具へたるものにて、天ツ神の授け給ひしものなることを思ひ得べきものなるぞかし、

慶應三年十二月

琴舎著書中類書　門人誌

音圖大全	一枚	既刻
同　解	五巻	
音圖略説	一巻	
音圖餘論	一巻	
音圖餘話	一巻	
靈氣考	一巻	
五氣論	一巻	近刻
音義本末考	一巻	既刻
古言類韻	十二巻	

助辭音義考　二卷

假字本義考　二卷

版權免許

明治十年三月七日

著者　茨城縣士族　堀秀成
東京第三大區七小區
赤坂一ツ木町五十四番地寄留

出版人　神奈川縣平民　門人　神保中三
神奈川縣第廿一大區四小区
山王原村百三十番地居住

東京
発兌
書林

日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　三丁目　丸屋善七
同　四丁目　金花堂
本石町二丁目　宛屋喜兵衛
大傳馬町三丁目　東生亀次郎